

FLORA KANAGAWA

Feb. 20. 2007 No.64

神奈川県植物誌調査会ニュース第 64 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会
TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846
http://nh.kanagawa-museum.jp/~kana-syoku/
e-mail katsu@nh.kanagawa-museum.jp
郵便振替 00230-5-10195



タンザワサカネラン. 2002 年 6 月 24 日 稲垣精秋氏撮影. 詳しくは本文
796 ページを参照してください.

高橋秀男：アメリカオニアザミは花期に根生葉がない	788
田村 淳・長澤展子・山本幸子：山北町で新たに発見したシダ植物—2006 年の成果—	789
田村 淳：神奈川県絶滅危惧 I A 類のミヤマアオダモの分布	790
松本雅人：スズメノチャヒキ属数種の疑問点	791
松本雅人：米軍 3 施設周辺で最近よくみられる帰化植物	792
奥津 均：セイコノヨシ・続報	792
木場英久：神奈川県でもムラサキナギナタガヤが採集された	793
木場英久：ヌメリグサのような花序	794
高橋秀男・堀川美哉：ハマラッキョウが三浦半島黒崎にも分布	795
勝山輝男・稲垣精秋：ラン科サカネラン属の未知の種タンザワサカネラン（仮称）	796
勝山輝男：神奈川県新産のオオアゼテンツキ	797
事務局：総会のお知らせ	798

アメリカオニアザミは花期に根生葉がない

(高橋秀男)

アメリカオニアザミ *Cirsium vulgale* (Savi) Tenore は唯一、県内に見られるアザミ属の帰化植物である。木場英久さんが、生命の星・地球博物館の催し物に参加した人に、早川の河川敷にあるアザミの名を聞かれた。そのアザミは根生葉がなく、頭花が上を向き、葉身が茎に沿って下り、それに鋭い刺のある巨大なアザミであった。早速、木場さんはアメリカオニアザミではないかと見当をつけて、『神奈川県植物誌 2001』に当たったところ、アメリカオニアザミによく類似しているが、根生葉がないところが違っていた。また、この種は小田原には分布の記録がなかったので標本も作成した (KPM-NA0126387 渡辺建雄ほか 2006.8.18)。

私も気になったので、博物館へ標本の閲覧に伺った折に、木場さんに案内して頂き生育地を見に行った。それは紛れもなく、アメリカオニア

ザミであった。

そこで私も原記載やそのほかの図鑑類、日本で記録されている帰化植物を調べてみた。門田裕一さんが執筆した『長野県植物誌』(1997)では根生葉は花期にも生存すると記しているが、『日本の帰化植物』(2003)では根生葉はふつう花時には生存しないと修正している。清水・森田・廣田編著『日本帰化植物写真図鑑』(2001)にはアメリカオニアザミの写真が掲載され、小型の根生葉が見える。上野達也さんによる『千葉県自然誌』(2003)では「花期に根生葉がある」と記しているが、但し書きがあり、「アメリカオニアザミ、ノアザミ、ハマアザミは枯れていないことがある」としている。そのほか、いくつか国内外の植物誌を見たが、花期の根生葉の様子についてふれたものはなかった。多くの記載では越年草で、冬は大きなロゼットで過し、翌年開花して枯死するとあった。筆者も知る限りの各地の生育地を調べる一方、横浜植物会の田中

訂正したアザミ属の検索表

- A. 茎に著しい刺のある翼がでる..... (1) アメリカオニアザミ
- A. 茎に翼はでない
 - B. 花期に根生葉がある
 - C. 総苞は幅6.5～8.5cmで大型、総苞片は中部付近で幅5～9mm、縁辺に刺が列生する.. (2) フジアザミ
 - C. 総苞は幅3.5cm以下で小型、総苞片は中部付近で幅1～4mm. 全縁である
 - D. 頭花は花茎の先に1～2個つき、花時には點頭する。湿原に生える..... (3) キセルアザミ
 - D. 頭花は多数つき、花時には直立する
 - E. 葉は厚く革質、表面は光沢がある。著しく硬い刺がある。海岸に生える..... (4) ハマアザミ
 - E. 葉は上記のようでない
 - F. 頭花は粘着する。田の畦に多い。春に咲く..... (5) ノアザミ
 - F. 頭花は粘着しない。草地、林縁に生える。秋に咲く..... (6) ノハラアザミ
 - B. ふつうは花期に根生葉は枯れていない (しばしばモリアザミは花時に生存することがある)
 - C. 頭花は上向きに咲き、総苞片は開出する。葉は有柄..... (7) モリアザミ
 - C. 頭花は横向きまたは下向きに咲き、総苞片は反曲または短く直立する。葉は無柄
 - D. 総苞は卵形または鐘形
 - E. 越年草。花冠は毛管状で狭筒部は広筒部より、1.5～2倍長い..... (8) タカアザミ
 - E. 多年草。花冠はやや幅が広く、狭筒部は広筒部と同長または短い
 - F. 頭花は短柄またはやや長い柄がある。一般に葉の刺は細く短く、長さは1cm以下.. (9a) タイアザミ
 - F. 頭花は無柄または短柄がある。葉の刺は太く長く、長さは1～1.5(～2)cm
 - G. 丹沢、箱根の風衝草原に生える。頭花はやや穂状に密集してつく... (9b) ハコネアザミ
 - G. 海岸の草地に生える。頭花は著しく多数が密集する..... (9c) イガアザミ
 - D. 総苞は筒形
 - E. 頭花は短い柄がある。総苞片は伸長して反曲する..... (10) ホソエノアザミ
 - E. 頭花は柄がない。総苞片は短く反曲しない..... (11) アズマヤマアザミ

京子さんにも依頼して花期の生態を調べてもらった。しかし、花期の個体は全て根生葉が枯れて見られなかった。したがって、アメリカオニアザミは根生葉の有無は検索表のキーには使えないことが明らかになった。そこで、訂正をしなければならなくなったので、取り敢えず本誌で新しい検索表を作成しておくことにした。

山北町で新たに発見したシダ植物 — 2006 年の成果 —

(田村 淳・長澤展子・山本幸子)

著者の一人田村はフロラカナガワ 60 号で山北町内の暖地性シダについて報告した(田村 2005b)。2006 年から長澤と山本も加わり、数箇所シダ植物相を調査したところ、山北町内では新産のシダや、丹沢山地では産地の少ないシダを合わせて 5 種 1 雑種発見したので報告する。なお、種の順番は県内で産地の少ない順である。

タキミシダ *Antrophyum obovatum* Baker

県内の記録は、湯河原町奥湯河原と葉山町森戸川、小田原市入生田である。このうち現存するのは入生田の 1 株である。今回発見したのは山北町内のある場所であり、沢沿いの岩壁に 1 株が着生していた。これについては田村・山本(2006)で報告した。

ホソイノデ *Polystichum braunii* (Spenn.) Fée

県内では静岡県在住の細倉哲穂氏により南足柄市矢倉沢で発見された(田中 1992)のが最初である。2004 年になって世附国有林内を流れるフジモク沢の溪畔林下でホソイノデが 2 株発見された(田村 2005a)。2006 年 5 月には中川川支流の西沢でホソイノデを 1 株発見した。この株は登山道上に生育しており、いつ踏まれても、あるいはいつシカに採食されてもおかしくない状態であるが、まだソーラスをつけていなかったことから採集を控え、写真撮影したにとどめた。2006 年 12 月時点でも株は現存していた。

アマギイノデ *Polystichum* × *mashikoi* Sa.Kurata

イノデとイノデモドキの雑種。県内では古くから湯河原の産地が知られており、その他南足柄市(田中 1997)、城山町(小崎 1998 KPM-NA0110793)などの産地がある。今回、山北

町市間の沢沿いのスギ人工林下で 1 株を発見した。イノデとイノデモドキの中間的な艶をしていたことから、見た瞬間にアマギイノデと思った。葉柄と葉軸の鱗片もまさに両親の中間形で、胞子はイレギュラーであることからこの雑種であると確信した。岡武利氏に同定していただいたところ、アマギイノデでよいとのことだった。これまでに両親の混生地を多く見てきたが、アマギイノデを発見したのはこれが始めてである。できにくい雑種と思われる。

キジノオシダ *Plagiogyria japonica* Nakai

県内では湯河原から箱根外輪山にかけてと三浦半島、横浜市北西部に分布地点がある程度である(青木 2001)。丹沢山地では松田町虫沢で採集されたと報告されている(勝山ほか 1997)が、標本を確認していない。発見したのは山北町川西金山のスギ人工林下で 1 株のみ生育していた。この人工林とその周辺ではオオカナワラビ、ナンゴクナライシダ、サイゴクベニシダ、オオバノハチジョウシダ、アタクサシダ、クリハランなどの暖地性シダやオニイノデが生育していることから、自生地一帯は山北町内随一の暖地性シダの生育地であろう。

サイゴクベニシダ

Dryopteris championii (Benth.) C.Chr. ex Ching

県内での分布は平野部から山麓部にかけて点在している程度である(田中 2001)。丹沢山地でも秦野市菩提(佐々木シゲ子 2001 KPM-NA0123241)、愛川町上三増(田中一雄 1986 KPM-NA055361)など数箇所で見られているのみである。発見したのは、キジノオシダも生育していた川西金山のスギ人工林下である。斜面の上部に 1 株のみ生育していた。

ヘラシダ *Deparia lancea* (Thunb.) R.Sano

県内では主に箱根山地、大磯丘陵、三浦半島といった相模湾沿岸部に分布している。丹沢山地では非常に少なく、1979 年以前の文献記録として YA-6 と YA-8 の 2 つのメッシュがあげられている(勝山ほか 1997)。最近では城川四郎氏により松田町で採集された程度だった(城川 1999 KPM-NA0115890)。発見したのは山北町市間の沢沿いの岩壁と斜面の遷急点で、た

て1m×よこ2mの範囲に生育していた。

以上のシダの他に、山北町内には、キノクニベニシダ、ハコネイノデ、オオタニイノデ、ナンゴクナライシダ、オオカナワラビ、タニイヌワラビなども生育している(田村 2005b)。また、イヌチャセンシダが峰(増子忠治・岩田実・中山博子 1997 KPM-NA0109420)や世附大又沢(中山博子 2006 KPM-未登録)で発見されている。ママシヤブソテツも神縄に自生地がある。これらのことから、山北町は暖地性シダの宝庫と判断できる。

なお標本は、採集しなかったホソイノデを除いて神奈川県立生命の星・地球博物館に収めた。最後に、アマギイノデの標本を同定していただいた岡武利氏にお礼申し上げる。

引用文献

- 青木清勝, 2001. キジノオシダ科. 神奈川県植物誌調査会(編), 神奈川県植物誌 2001, pp. 31-33. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 勝山輝男・高橋秀男・城川四郎・秋山守・田中徳久, 1997. 丹沢山地の種子植物・シダ植物. (財)神奈川県公園協会・丹沢大山自然環境総合調査団企画委員会(編), 丹沢大山自然環境総合調査報告書丹沢山地動植物目録 1997, pp. 331-382. 神奈川県環境部, 横浜.
- 田中一雄, 1992. 観察記録「シダノート」より. 日本シダの会会報, 2 (91-92): 7-9.
- 田中一雄, 1997. アマギイノデ. FLORA KANAGAWA, (45): 504-506.
- 田中一雄, 2001. オシダ科オシダ属. 神奈川県植物誌調査会(編), 神奈川県植物誌 2001, pp. 83-100. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 田村 淳, 2005a. 丹沢山地新産のシダ植物—ホソイノデ—. 神奈川県自然環境保全センター報告, (2):59-60.
- 田村 淳, 2005b. 山北町の丹沢山地山麓の暖地性シダ. FLORA KANAGAWA, (60):739-741.
- 田村 淳・山本幸子, 2006. 丹沢でタキミシダを発見. FLORA KANAGAWA, (62): 764.

神奈川県絶滅危惧 I A 類のミヤマアオダモの分布

(田村 淳)

神奈川県絶滅危惧 I A 類のミヤマアオダモ *Fraxinus apertisquamifera* H.Hara を新たに数箇所確認したことから、分布地点と個体数は意外に多いと考えるに至ったので報告する。

ミヤマアオダモは本州中部と四国に分布するモクセイ科の樹木であり、深山に生えアラゲアオダモよりもさらに標高の高い所に出現する種である(長谷川 2001)。特徴は種小名の意味のとおり芽鱗が開出することである。近隣地域では、山梨県道志村前ノ岳～御正体山(2005.7.11 田村 淳, 標高 1500m)、山梨県都留市御正体山(2006.6.26 田村 淳, 標高 1680m)、山梨県南都留郡河口湖町三ツ峠山(2005.8.7 田村 淳, 標高 1400m)、静岡県天城山, 金時山, 富士山, 愛鷹山, 毛無山など(以上、『静岡県植物誌』)、静岡県と山梨県の県境の青笹山(2006.10.22 田村 淳, 標高 1540m)に分布している。

県内におけるミヤマアオダモの記録は、『丹沢山塊の植物調査報告』(林ほか 1961)によれば塔ヶ岳—丹沢山—蛭ヶ岳, 丹沢山—本間ノ頭, 大室山がある。『神奈川県植物誌 2001』(長谷川 2001)では蛭ヶ岳と丹沢山の産地があげられ、『神奈川 RDB2006』(勝山ほか 2006)では丹沢山山頂付近, 不動ノ峰, 蛭ヶ岳があげられているが、どちらも林ほか(1961)が報告した大室山の産地については言及していない。しかしながら、大室山の標本が存在することが逢沢(2003)によって確認されている。

これまで知られていた県内におけるミヤマアオダモの分布地点からすると、ミヤマアオダモは丹沢山地の標高 1400m 以上のところに生育していることを予想できた。そのうち、最近分布が確認されていない大室山と全く記録されていない檜洞丸におけるミヤマアオダモの分布のことが気になっていた。これらの山に行った際にミヤマアオダモの存在に注意していたところ、大室山の山頂付近に 10 個体程度を見つけることができた。檜洞丸でも登山道沿いを調べてみたが、あったのはすべてアラゲアオダモであった。これらの他に、清川村堂平(1280m)、清川村天王寺尾

根 (1330m) でもミヤマアオダモを確認した。いずれの場所も 1 個体ということはなく、そばに数個体が生育していた。

ミヤマアオダモの個体数が最も多いのは丹沢山山頂付近であろう。個体数を計測したわけではないが、30 個体はあると思われる。場所によってはアラゲアオダモと混生していることから、これまで見逃されてきた個体が多いと思う。以上から、ミヤマアオダモは県内で 50 個体を超えるくらいはあると思われる、今後の詳細な調査によって県内での RD カテゴリーは変更されるかもしれない。

ミヤマアオダモは丹沢山地の標高 1300 ~ 1400m 以上のところで今後も見つかる可能性がある。なお、県内では丹沢山地でのみ分布が知られているが、上記のように『静岡県植物誌』によると箱根山地の金時山の静岡県側にも記録がある。そのため、箱根山地でも金時山や神山の神奈川県側で見つかる可能性がある。

丹沢山地におけるミヤマアオダモの生育地では、オゾンをもととする大気汚染によってブナや他の樹木の立ち枯れが発生している。しかし、ミヤマアオダモへの大気汚染の影響は不明である。丹沢山山頂付近ではシカによるミヤマアオダモの樹皮剥ぎ跡を多く見かけることから、シカの樹皮食いが個体数を減少させる要因の一つと判断できる。ミヤマアオダモの保護のためにはウラジロモミと同様に樹皮食い防護ネットを設置することが必要である。

なお、ここであげた標本はすべて神奈川県立生命の星・地球博物館に収めた。

最後に、一緒にミヤマアオダモを探してくれた中西のりこさん、長澤展子さん、村上美奈子さんにお礼申し上げる。

引用文献

- 逢沢峰昭, 2003. 「林ほか (1961): 丹沢山塊の植物調査報告」の標本について. FLORA KANAGAWA, (55): 673-683.
- 林 弥栄・小林義雄・小山芳太郎・大河原利江, 1961. 丹沢山塊の植物調査報告. 林試研報, 133: 1-128+16pl.
- 長谷川義人, 2001. モクセイ科. 神奈川県植

物誌調査会 (編), 神奈川県植物誌 2001, pp.1118-1126. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植物誌調査会, 2006. 維管束植物. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久 (編), 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp. 37-130. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

杉本順一, 1984. 静岡県植物誌. 814pp. 第一法規出版, 東京.

スズメノチャヒキ属数種の疑問点

(松本雅人)

スズメノチャヒキ *Bromus japonicus* Thunb. には、2 型がある。葉鞘に長毛がある型と、短毛がある型である。短毛型はムクゲチャヒキに毛の生え方がよく似ている。最近、富山県産のスズメノチャヒキを調べて、同じことに気づいた。種の範囲内での違いか、それとも外国型か、興味がつきない。

ムクゲチャヒキ *B. commutatus* Schrad. は、葉鞘、花序の軸が多毛である型と、葉鞘の毛がまだらで、花序の軸の毛がほとんど肉眼で見えない型の 2 型がある。多毛型から少毛型に変化していくのか、今のところわからない。

ヒゲナガスズメノチャヒキ *B. diandrus* Roth の葎の長さは、0.5 ~ 5mm と、非常に幅がある。同一株間、同一小穂間でも、かなりの長さの違いがある。本種は *B. sterilis* L. と *B. rigidus* Roth の雑種由来とされる (勝山 2003) が、それにしても、両親の葎が 1 ~ 2mm と小さいので、5mm にもなることが納得できない。

スズメノチャヒキ、ムクゲチャヒキ、カラスノチャヒキの 3 種が混生している場合、交雑している可能性がある。今のところ、何がスズメノチャヒキで、何がムクゲチャヒキか自信が持てず、交雑であることも説明できない。幸いにも、神奈川県はよい観察地に恵まれているので、みなさん、是非、注意深く観察してください。

文献

- 勝山輝男, 2003. スズメノチャヒキ属. 清水建美編, 日本の帰化植物, pp.262-267. 平凡社.

米軍 3 施設周辺で最近よくみられる 帰化植物

(松本雅人)

厚木基地、相模補給廠、座間キャンプで共通してよく見られるものに、ヘラオオバコ、ブタナ、カロリナアオイゴケ、カキネガラシ、オオミミナグサがある。これらは芝生との関係で持ち込まれたものであろう。

1. 厚木基地周辺

アイナエヤハルリンドウなど、非常に珍しい在来植物が残っている一方、多くの帰化植物が見られる。ニワゼキショウ類のルリニワゼキショウが一面に繁殖している。一番、圧巻なのは、セイヨウウツボグサである。ある時期になると芝地一面が紫色の絨毯になり、2～3日であつというまに刈り取られる。セイヨウオオバコ、ヌカススキ、ハナヌカススキ、オオミミナグサが最近増えている。アレチハナガサ、クサビガヤは確実に広がりつつある。ボウムギは他のドクムギ類と交配しながら変化しつつある。コメツブヤエムグラはあまり増えない。シロノジシャは非常に拡散が速く、あつというまに多くなった。数年間は拡大・拡散せず、南西の端のみであったが、ある時期に急に広がりだした。逆にミナトクマツヅラは一時的に増えたが、あつというまに少なくなった。あまり殖えないが、根強く生き残っているのが、ミヤコグサの一種である。芝地にはりついていて、繁殖期が刈り取りと重なり、うまく増えないが、何とか栄養繁殖している。なかなかよい標本がとれないネビキミヤコグサのように茎が中空であるが、地中に根を伸ばさず、セイヨウミヤコグサのように多毛で、ミヤコグサに近い種である。

2. 相模補給廠

カワラニガナが一面にぎっしり生えている。乾燥気味な草地が適しているのか特異に増えている。帰化植物ではキキョウソウ、ヒナキキョウソウが一番多く見られる場所である。一部返還場所にオヒゲシバ、サヤヒゲシバが多く見られたが、ここはコンクリートで被われてしまい、そこから土を移動したところに繁殖しつつある。フユヌカボ、ムクゲチャヒキ、カラスノチャヒキ、ハルガヤ、ホソセイヨウヌカボ、ムシトリマンテマ、イヌナギナタガヤ(?)は種子が風に飛ばされやすく、

風の方向に影響を受けて、年によりかなり広がり方が違っている。施設内に繁殖していても、なかなか外に出てこないものが多い。その意味で強風に飛ばされる時期に種子が熟して、かつ飛ばされやすい種類のものが帰化するので、そのときの季節と風の方向によって生える帰化植物が違っている。キレハイヌガラシは水分を要求するため、水分の多いアスファルトの間隙で繁殖している。ハナヤエムグラ(アカハナムグラ)が、ここ2～3年、急に増えだした。フェンスと芝生の張替えが原因と思われる。

3. 座間キャンプ

ブタナが多い地域である。オオミミナグサとそれに近いミミナグサ2種が確実に周辺地域に拡散しつつある。特異なのは、コテングクワガタで、オオミミナグサとコテングクワガタが施設内の芝生一面に生えているが、コテングクワガタはめったに外に出てこない。オオミミナグサはよく周辺に出てくる。

セイコノヨシ・続報

(奥津 均)

セイコノヨシについては筆者がフロラ・カナガワ No.47 (1998-Dec.) に、鎌倉市内の深沢側に流れる大塚川、笛田川、新川流域についてレポートしてある。今回は大船フラワーセンターから下流で藤沢市との境を流れる柏尾川に群生していたので報告する。

セイコノヨシはヨシ(アシ)と同じように水湿地や河川近くの湿地に群落を作り生育する植物であるが、鎌倉で現在見られる場所は乾燥地である。このことは県植誌 2001 でも「元来、水湿地や河川近くの湿地であった可能性が高く、環境が改変された後も残ったものと思われる」とあり納得できた。神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006 には絶滅危惧 I B 類にされている。

今回、群落をなしていた場所は古館橋(コタテバシ)から下流の右岸に多くあり、護岸は高さ4～5mの石作りで作られ、その下部の石が流されないように幅1～2mで二重の護岸になっていて、その場所は長年の土砂が溜まり、その厚さは50cm以上にもなり、今は完全に乾燥地と変わっている。そこに群生しており、2～3年



セイタカアワダチソウと混生するセイコノヨシ。

前あたりはヨシと半々位で混生していたが、ヨシは丈が低いためと生育地が乾燥化したので、いまでは少なくなってきた。その代わりセイタカアワダチソウが勢いをつけてきている（写真）。

余談ではあるが、セイコノヨシは中国杭州の西湖にちなんだとあり、筆者は一昨年西湖へ見に行ったが、昔の絵葉書にあるように泥混じりの土手に生えていると思ったが、現在は石で作られた護岸が水面より40cm程の高さで構成され、見ることができなかつたのは残念であった。

神奈川県でもムラサキナギナタガヤが採集された

（木場英久）

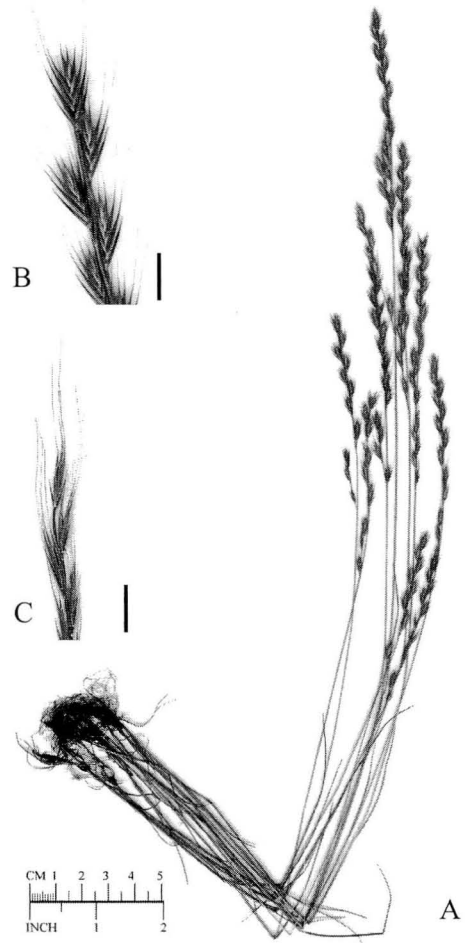
数年前に馬場しのぶ氏は海老名市国分北でムラサキナギナタガヤ *Vulpia octoflora* (Walt.) Rydb. を採集されていて（馬場 2006）、2006年6月6日に同じ場所で採集した標本を県博に入れている（KPM-NA0126350）。松本雅人氏も、同年5月29日、相模原市宮下本町で本種を採集された（KPM-NA0126330）。

本種は北米原産で、日本では初め兵庫県で採集され（大井 1937）、その後、西日本を中心に関東以西の各地で採集されている古参の帰化植物である。近県では千葉・静岡に記録があるが（木村 2003, 杉本 1984）、なぜか『神奈川県植物誌

2001』には載っていない。

県博にある本属の県内産標本を見直したが、本種は含まれていなかったの、見落とされていたのではなく、近年になって2ヶ所に帰化したものと思われる。次ページに『神奈川県植物誌 2001』の検索表に本種を追加したものを示す。

松本氏のもって来られた標本をじっくり見ようと、ポケットからルーペを取り出して、のぞき込んだりしていると、彼に「なーに悠長なことしてんの！こんな見た瞬間にわからなきゃだめヨ！」と急かされることがしばしばある。イネ科担当としては小さくなるばかりである。彼によると、ナギナタガヤとオオナギナタガヤは、小穂が花序の枝に沿っていて、花序が全体としてほっそりしているのに対して、イヌナギナタガヤとムラサ



A: ムラサキナギナタガヤ (KPM-NA0126330) の全体、
B: 同花序、C: ナギナタガヤ (KPM-NA1062501) の花序。
BとCのスケールは5mm。

ナギナタガヤ属検索表

- A. 第1苞穎は長さが第2苞穎の1/2以下. 花序は葉鞘から抜けきらないことが多い
 - B. 護穎のへりは微小な突起があるだけ…………… (1a) ナギナタガヤ
 - B. 護穎のへりに長い毛がある…………… (1b) オオナギナタガヤ
- A. 第1苞穎は長さが第2苞穎の1/2 ~ 3/4. 花序はふつう葉鞘から抜け出る
 - B. 小花の数は4 ~ 8, 護穎の芒は第1小花では護穎より長い…………… (2) イヌナギナタガヤ
 - B. 小花の数は5 ~ 13, 護穎の芒は第1小花では護穎と同長か短い…… (3) ムラサキナギナタガヤ

キナギナタガヤは小穂がやや開出してつく傾向があり, さらにムラサキナギナタガヤは, 他の種と違い芒が短いので, 「見た瞬間に」わからなければならぬのだそうである. 今回, 多数のナギナタガヤの標本を見直してみたが, 確かに彼のいうとおりであった.

たくさんの標本でナギナタガヤの第1苞穎を観察して気づいたことだが, 花序の先端や花序の枝の先端の小穂では第1苞穎が長くなる傾向がある. 先の検索表で同定を行なう場合には, 花序の枝先の小穂は無視して, やや見づらいが内側にある小穂の第1苞穎を見るようにするとよい.

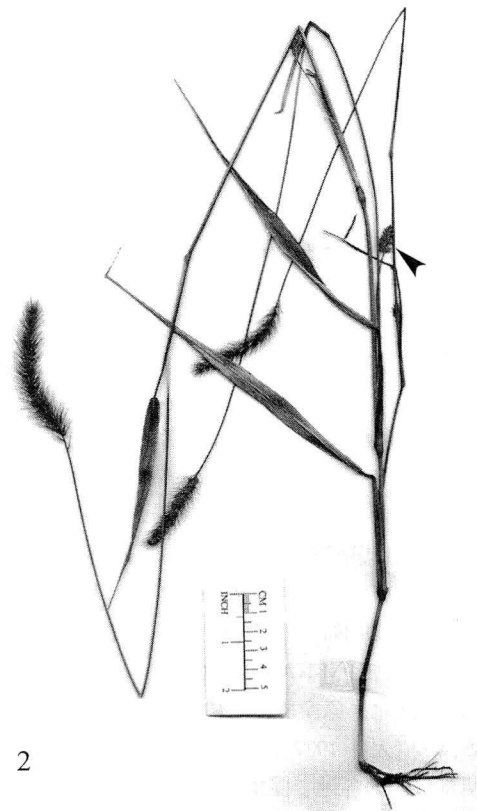
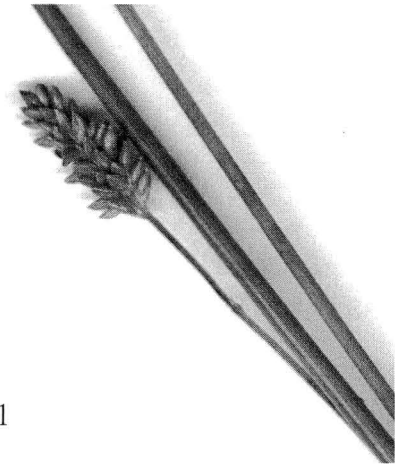
文献

馬場しのぶ, 2006. 植物標本同定会 話題はヤマキツネノボタン. 厚木植物会ニュース, (25): 14.
 木村陽子, 2003. ナギナタガヤ属. 千葉県史料研究財団編, 千葉県の自然誌 別編4 千葉県植物誌, pp. 722, 727.
 大井次郎, 1937. 日本植物覚書. 植物分類地理, 6: 292-293.
 杉本順一, 1984. 静岡県植物誌. 814pp. 第一法規出版, 東京.

ヌメリグサのような花序

(木場英久)

右上の図1の花序はヌメリグサかハイヌメリに見えないだろうか. 2006年12月6日, 県博で菌類を担当している出川学芸員がイネ科につくサビ菌類を採集するのにつきあって, 博物館の近くの早川の河原を歩いていた. ススキ, オギ, オオクサキビ, ヌカキビ, シマスズメノヒエ, カゼクサ, ネズミノオなど, 多くのイネ科植物は花期を過ぎ, 実を落とし, 枯れかけていたが, 植物体が枯れるこの時期がサビ菌採集の適期だそうだ. 彼は菌にやられているイネ科を見つけるたびに, いつものことではあるが, 狂喜しながら, この植



剛毛のない花序をつけていたアキノエノコログサ. 図2のアローヘッドは腋生する花序.

物は何かと聞いてくる。その中に興味深いものを見つけたので紹介したい。

じつは、この花序は枯れかけたアキノエノコログサ *Setaria faberi* R.A.W.Herrm. の葉腋から出た若い花序なのである(図2)。アキノエノコログサなのに、腋生の花序では長い剛毛をつけていなかった。生えていた場所が乾燥した土手の上だったのと、頂生する花序には通常の剛毛があったのでアキノエノコロとわかったが、こんなありふれた種の同定に首をひねってしまった。採集適期以外に歩いてみるのもよいものと思った。

標本：小田原市入生田 2006.12.6 木場英久・出川洋介 KPM-NA0126253.

ハマラッキョウが三浦半島黒崎にも分布

(高橋秀男・堀川美哉)

ヤマラッキョウは海岸から山地の草原に生えるユリ科の多年草である。今まで山地に生えるものも海岸に生えるものも、ヤマラッキョウとして何の不自然も感じていなかった種である。ところが2005年に国立科学博物館の近田文弘氏が、伊豆須崎の維管束植物相の調査をした際、海岸に生える種について新種ハマラッキョウ *Allium litorale* Konta として記載された(Konta et al 2005)。著者らは本年11月、横浜植物会で伊豆須崎の植物観察会を実施した。このときにハマラッキョウに興味があったので、丹念にありそうな環境を注意深く探してみたが発見できなかった。その記載文を読むと、葉は扁平で、幅が広いところに大きな特徴がある。採集した場所は「須崎の灯台前手前の丘陵(標高15m)で、2004年11月19日に採集した」とあった。三浦半島にも海岸に生えるものがあることを思い出し、いつか機会があったら調査しようと考えていた。

11月下旬に、横須賀市在住の高田静子さんから、三浦半島の黒崎にもハマラッキョウがあると筆者の一人堀川美哉に連絡があった。高田さんによると、葉の形態や花序の様子などを観察したところ、横浜植物会の観察会で配布したハマラッキョウの図と一致したという。早速、高橋・堀川の2人で確認に行き、ハマラッキョウの証拠標本を採集してきた。

仙石原産のヤマラッキョウでは、葉は細く、横断面は鈍三稜形である。このことは『神奈川県植物誌2001』で解説文は「葉は扁平」と記し、図には三角形を呈した断面図が書き添えてあった。この矛盾した記述は生きた個体を観察しなかったために起こった誤りであり、ユリ科を担当した筆者の一人高橋の観察が不備であったためである。その理由はヤマラッキョウが乾燥標本になると圧されて立体感がなくなり、ほとんど扁平になるためと考えられる。生きた個体で両分類群を比較するとその差異は明瞭である。ハマラッキョウは、花茎は太さ約2mm、葉の断面は扁平で主脈が顕著、幅3~5mm、頭花は径4cmほどある。外花被片は長さ6mm、幅3mm、淡紅紫色である。種子は長さ約3.5mm。ヤマラッキョウの葉は断面が鈍三稜形で、幅1~4mm、頭花は径3~4cm、外花被片は長さ5mm、幅3mm、赤紫色である。種子は長さ約3mm。ハマラッキョウはヤマラッキョウの海岸型と考えられているが、この両分類群は連続している可能性もあり、さらに調査が必要で



ハマラッキョウ。

ある。三浦半島や真鶴岬にも須崎の海岸に似たような風衝草原があり、『神奈川県植物誌 2001』を見ると、いくつか分布点が打たれているので、これらの生育地の調査も今後の課題である。

最後に生育地の情報を提供して下さった横浜植物会の高田静子さんに厚くお礼申し上げる。また、標本の閲覧・撮影に便宜をはかって下さった国立科学博物館・植物研究部の秋山 忍先生に謝意を表したい。

文献

Fumihiko Kenta, Sadamu Matsumoto & Teruo Katsuyama, 2005. New and Interesting Taxa of Vascular Plants from Suzaki, Shimoda City, Central Japan. Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 31: 19-33.

今田文弘・松本 定・勝山輝男・小西達夫・笹本岩男・野口英昭, 2006. 伊豆須崎の維管束植物相・植生. 国立科学博物館専報, (42): 113-111.

では5月中に花茎を伸ばして開花するが、この植物は6月末から7月はじめに花茎を地上に出す。毎年、観察しながら図鑑を調べてみたが、該当するものが見当たらない。そこで、タンザワサカネランと仮称して写真を整理した。

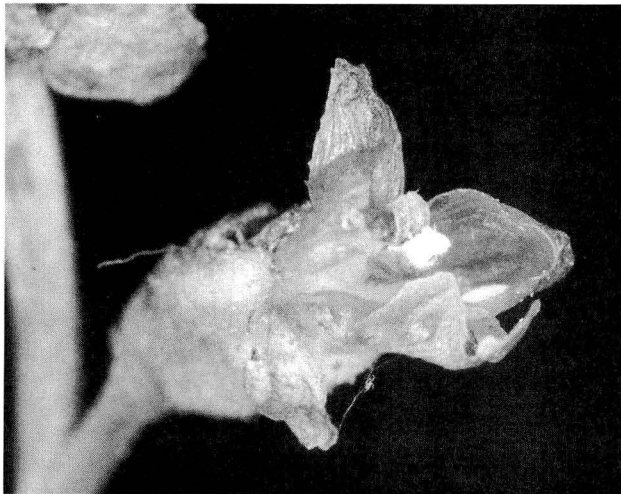
サカネラン属 *Neottia* Guett. と思われるが、写真だけではそれ以上調べようがないので、2006年に国定公園内の採集許可をとり、7月1日に三ッ峰山稜の生育地に行ってみた。例年発生するモミ林内で数本のタンザワサカネランを見出した。時期が少し遅かったのか、天候のせいかな、花は残っているが、所々傷んで褐色に変色し始めていた。高さ10cmで15花ほどをつけた個体を1本掘り取り、液浸標本を作製した。

根は長さ1~2cm、幅約1.5mm、多数が放射状に生え、サカネランと大きな違いはない。茎は基部で径6~7mm、花序の基部で径3~4mm、花序の基部までの長さは約10cm、白色または多少淡褐色を帯び、3個の鱗片葉があり、4個目か

ラン科サカネラン属の未知の種タンザワサカネラン（仮称）

(勝山輝男・稲垣精秋)

2002年、筆者の一人稲垣が丹沢三ッ峰山稜でサカネラン *Neottia nidus-avis* (L.) L.C.Rich. var. *manshurica* Kom. に似た腐生ランを見つけ、写真に撮った(表紙写真参照)。外形はサカネランに似ているが、全体に小型で白色、花弁がほとんど開かないなどの点が異なる。サカネランは丹沢



上：タンザワサカネランの花。がくと花弁を無理やり開いたところ。中心の白く見えるのが花粉塊。右：全草。



ら苞葉に移行する。花序は長さ8～9cm、苞葉は披針形で下方の2個は鱗片葉と同形同大で長さ2.5cm、3個目より急に小さくなり長さ約7mmとなり、上方に向うにつれて次第に小さくなる。花柄は長さ3～5mm。子房は下部のものは長さ約1cm、幅約5mm、上部のものは長さ約4mm、幅約2mm、全体に細かい腺毛が密生する。花卉が開いていないので、どの時点が開花時かよくわからないが、下方のものはすでに受精して子房が大きくなりはじめた状態である。がく片と側弁は倒卵形で長さ2～3mm程度、唇弁は長さ3～4mmで、先は2中裂する。薬柱は短い円柱状で先は2片に分かれ、上側（唇弁の反対側）のものはやや後方に反り返り、花粉塊は2個。

生命の星・地球博物館のサカネランおよびヒメノヤガラと同定されていた標本を調べたところ、サカネランの標本から世附織戸峠のものが、ヒメノヤガラの標本から尊仏の土平～塔ノ岳のタンザワサカネランの標本が出てきた。いずれも標高800～1000mあたりで採集されたものである。同じ丹沢山塊ではあるが、離れた3産地で採集されていることから、丹沢では広範囲に分布していると思われる。国立科学博物館、首都大学東京牧野標本館の標本を調べたが、タンザワサカネランと思われる標本はなかった。今のところ、丹沢以外の標本はない。

日本産のサカネラン属にはサカネラン、エゾサカネラン *N. nidus-avis* (L.) L.C.Rich. var. *nidus-avis*、ヒメムヨウラン *N. asiatica* Ohwi、カイサカネラン *N. japonica* Furuse、ツクシサカネラン *N. kiusiana* T.Hashim. & Hatus. がある。全体に小型な点、子房に細かい腺毛が密生する点で、タンザワサカネランはツクシサカネランにもっとも近いと思われる。

ツクシサカネランは鹿児島県薩摩郡鶴田町（標高100m）で採集された標本に基づいて記載された（Hashimoto & Hatusima 1991）もので、基準標本のほかは、愛知県で採集された（愛知県自然史研究連絡会編 2002）にすぎず、しかも、鹿児島県、愛知県ともに最近の確認はなく、絶滅が危惧されている。Hashimoto & Hatusima (1991) の記載を読むと、花卉が開き、がくや側弁は長さ約4mmあり、唇弁は長さ5.2～7.5mmあり、常緑広葉樹林内に生えるという。また、愛知県

自然史研究連絡会編（2002）の162ページに高木典雄氏が採集された愛知県産のツクシサカネランの標本写真があるが、これを見ると唇弁は大きく開いて長さ6mmほどある。

タンザワサカネランはがくや花卉がほとんど開かないこと、がく片と側弁は長さ2～3mm、唇弁は長さ4mm未満と小さく、標高1000m前後のモミ林内に生えることなど、ツクシサカネランとは異なり、新種の可能性が高いと考えている。しかし、花部の観察が不十分なので、来年、再度生植物を観察し、結論を出したいと考えている。

標本：丹沢三ツ峰 2006.7.1 稲垣精秋・勝山輝男 KPM0126331；尊仏の土平～塔ノ岳 1995.7.23 森川美也子 KPM-NA0103550（ヒメノヤガラと同定されていた）；世附織戸峠 1999.6.26 山本絢子ほか KPM-NA0116375（サカネランと同定されていた）。

文献

愛知県自然史研究連絡会編, 2002. 自然からの SOS レッドデータブックあいち・植物編解説. 242pp. 愛知みどりの会, 名古屋.

Hashimoto, T. & S. Hatusima, 1991. A new *Neotta* (Orchidaceae) species from Kyushu, Japan. *Ann. Tsukuba. Bot. Gard.*, 10: 41-44.

神奈川県新産のオオアゼテンツキ

（勝山輝男・中山博子）

2006年9月23日に筆者の1人中山が藤沢市大庭の遊水地で一見コアゼテンツキ *Fimbristylis aestivalis* (Retz.) Vahl に似たカヤツリグサ科テンツキ属植物を見つけた。小穂から瘦果を取り出してルーペで見たところ、瘦果の肩に毛がないので、コアゼテンツキと思い込み、コアゼテンツキとして標本を作製した。コアゼテンツキも神奈川県内では記録が少ないので、10月10日に再び現地に行き、デジタルカメラで全形、小穂、瘦果のアップ写真を撮影した。

後日、撮影した画像を整理していたところ、瘦果の表面が平滑ではなく、格子状の紋があるので、コアゼテンツキではないことに気づいた。そこで調べ直したところ、オオアゼテンツキ *Fimbristylis bisumbellata* (Forssk.) Bubani, *Dodecanthea* 30 (1850); *Scirpus bisumbellata* Forssk., *Fl. Egypt.-Arab.* 1: 15 (1775); *Fimbristylis*

liukuensis Tuyama in J. Jpn. Bot. 11: 250 (1935)と判明した。オオアゼテンツキは外観はメアゼテンツキ *F. velata* R.Br. やコアゼテンツキに似ているが、瘦果に格子紋があるので、むしろテンツキ *F. dichotoma* (L.) Vahl に近縁と考えられている。

オオアゼテンツキは地中海～アジア～オーストラリアの熱帯・亜熱帯に広く分布し、日本では沖縄に古くから知られ、Tuyama (1935) は *F. liukuensis* Tuyama を記載し、リュウキュウテンツキの和名を与えている。1988年に千葉県印旛沼と印旛沼に連なる利根川の河川敷で採集され(谷城 1990, 1991, 2003), 本州の分布が明らかになった。谷城 (1991) は印旛沼の産地は以前にサンドボンブによる造成または攪乱を受けた場所と報告している。しかし、谷城 (1990, 2003) は1956年に千葉県市原町で採集された標本が千葉中央博に残されていたことから、千葉県のオオアゼテンツキは以前から土着していたものと判断している。

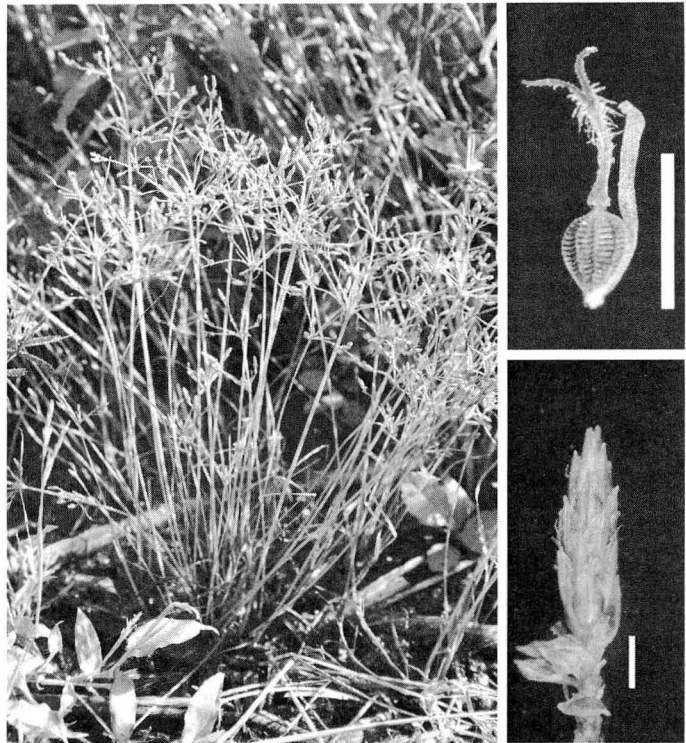
藤沢市大庭のオオアゼテンツキは引地川の低地に作られた遊水地の中で、比較的水はけの悪い10畳ほどの一角に密に生育していた。攪乱を受けた場所に発生したもので、人為的な移入や水鳥に運ばれた可能性があるが、印旛沼のケースとあわせて考えると、攪乱により埋土種子が地上に現われ、一斉に発芽した可能性も否定できない。いずれにせよ、人為的移入の確証はないので、千葉県のものと同様に土着のものとして扱いたい。

標本：藤沢市大庭 2006.9.23 中山博子 KPM-NA0125931.

文献

Tuyama, T., 1935. Notes on Japanese species of the genus *Fimbristylis* (I), J. Jpn. Bot., 11: 248-254.

谷城勝弘, 1990. 高等植物分布資料 (133), オオアゼテンツキ. 植物研究雑誌, 65: 358-359.



オオアゼテンツキ. 左: 全草, 右上: 瘦果, 右下: 小穂. スケールは 1mm.

谷城勝弘, 1991. 千葉県のオオアゼテンツキ. すぎの会会報, (2): 9-12.

谷城勝弘, 2003. カヤツリグサ科. 千葉県史料研究財団編, 千葉県の自然誌 別編 4 千葉県植物誌, pp.816-898. 千葉県.

総会のお知らせ

(事務局)

2006年度の総会は県立生命の星・地球博物館講義室で4月21日(土)の午後1時30分から開催します。万障お繰り合わせの上、お集まりください。なお、運営委員会も同じ場所での同日の午前10時から開催します。

編集後記

毎年度、事業計画や予算を考えるときには、本誌を3号発行することになっています。今年度は計画どおり3号を発行できましたが、この5年を振り返ってみると2号と3号の年度が交互にきています。来年度はこの法則を打破して、3号をお届けしたいと思っています。積極的なご投稿をお願いします。